

「症候からみた消化器病学」

名古屋大学第2外科 近 藤 達 平 編集
 名古屋大学第2内科 中 澤 三 郎 編集幹事
 名古屋大学第2外科 市 橋 秀 仁

大阪医科大学教授・第2内科

大 柴 三 郎

日常臨床の場において疾病の診断には自覚所見は極めて重要な手掛りがある。消化器、殊に消化管領域の疾患では身体生理学的所見のほとんど見当たらない患者が多い。このことは外来の tentative diagnosis には主訴や自覚症状によるところが大きい理由である。しかも消化器系症状を訴える患者は多いが、その多くはいわゆる不定愁訴と言われるもので臓器特異性のない症状である。したがって外来診断には自覚症状の詳細な聴取が大きい役割を占めてくる。主訴の長期の経過・軽重、病悩期間の長短、食事との関連性、患者ど欠かすことのできない病歴である置かれた環境なる。

1つ1つの自覚症状の発現機序は必ずしも解明されていないところも多い。明らかな他覚所見を有する患者、例えば吐下血、腫瘤の触知、黄疸、腹水、急性炎症に伴う腹壁の筋防衛などは疾患臓器の推定は必ずしも困難ではない。

主症状が不定愁訴である場合は臓器の推定すら容易ではないが、自覚症状を詳細に聴取するとき必ず幾つかの症状があり、これを総合すればある程度疾患を推定することができよう。

次に重要なことは身体生理学的所見をとらえた後の検査の手順である。この手順の思考過程をおろそかにすると患者への不利を招く結果とな

り、また、“いわゆる検査づけ”と言われる原因をつくる。しかしながら通常消化器疾患を扱ううえで最優先させるべきは悪性腫瘍性疾患の有無である。不幸にして例外的症例を除いて救命できる悪性腫瘍はすべて無症状であるということである。ここに諸検査とのジレンマが生じ、また、スクリーニング検査の重要性が示唆される。

本書はこれらの趣旨に沿って24の症候の解析から始まり検査の手順を述べ、最後にそれぞれの疾患の概念を簡単にまとめた新しい形式の教科書である。著者はいずれも第一線で診療教育に携わっているベテランであり、よくまとめている。

欲を言えば外科側の著者が多いため、われわれ内科医にとって幾分物足りない面のあることは否めないが、対象が学生、研修医、更に第一線の医師であることから、日常診療上極めて有用な書であると思う。

B5判 563頁 ¥16,000 1985

医歯薬出版 刊